



青少年赤十字

J R C ふ く し ま

編集発行

青少年赤十字  
福島県指導者協議会  
日本赤十字社福島県支部  
〒960-1197  
福島市永井川字北原田17  
TEL024(545)7998

人間を救うのは、人間だ。  
Our world. Your move.

## 指導者研修会・

## 学校公開を終えて



青少年赤十字耶麻地区指導者協議会長  
喜多方市立山都小学校長  
佐藤 裕 哉

十月十九日、紅葉が見頃を迎えた西会津町で、県内外から三百名ほどのご参加をいただき、JRC指導者研修会・学校公開が行われました。参加されたみなさんの感想を拝見させていただくと「とても勉強になった」「すばらしい実践だった」等、良い評価をお寄せくださった方が多く、とてもうれしく思いました。

今回は、小・中学校共に「教育課程」「授業の在り方」「教師の姿勢」という三つの視点で分科会を運営させていただきました。これは、JRCを学校教育に生かす糸口として設けたものであり、自校の実態や課題解決のヒントにして

いただきたいという願いがありました。日程の都合で十分な時間を設定できなかった面はありますが、それぞれの学校で今回の研究協議が生かされ、より効果的な取り組みを行っていただければ幸いです。

また、各分科会の指導助言者の皆さんから、全体会の中で、各分科会の内容を紹介していただけたことは、他の分科会の様子を知ることができ、大変参考になりました。

午後の基調講演は、千葉県支部赤十字奉仕団指導講師、稲積 修先生に「青少年赤十字と学校教育」という演題で行っていただきました。青少年赤十字の歴史やその取り組み

みについてお話をいただく中で、JRCの取り組みは、学校教育に求められている「主体的・対話的で深い学び」に繋がっていること、教育基本法とJRCの掲げる理念の多くが合致していること等学校教育をリードする実践を積み上げてきたことを理解することができました。また、JRCの先見性は今後益々、学校教育の中で大切な役割を担っていくことについても納得することができました。

「気づき」「考える」「実行する」そして「振り返る」。この言葉の持つ、意義深さを今回の研究会を通して、改めて考えさせていただきました。また、「地域に根ざす」「地域人材の活用」という視点も、児童生徒を深い学びに引き込むには重要な要素であることを学ばせていただいた研究会でした。

西会津小学校・西会津中学校のすばらしい実践と、丁寧なご指導を頂戴した指導助言

者・講演者の方々、熱心に協議に加わっていただきましたご参会の皆様、そして、多くのご指導、ご支援をいただきました、福島県教育委員会様、福島大学様、喜多方市・西会津町・北塩原村各教育委員会様、青少年赤十字福島県指導者協議会様、日本赤十字

社福島県支部様、耶麻地区賛助奉仕団様に深く感謝申し上げます。  
秋の日は暮れは早く、紅葉した山々はすでに暗闇の中になりました。しかし、明るく晴れやかな気持ちでこの一日を振り返りながら、西会津町を後にさせていただきました。

## 青少年赤十字研究推進校として



西会津町立西会津小学校長  
岡崎 秀明

今にして思えば、わたくし、

でした。

船長の見通しの甘さから、ずいぶん遠回りをしてしまったと感じています。船頭、船員、なにより乗客に不利益を与えてしまったのだらうと思えます。言い訳になってしまいましたが、平成二十九年四月に本校に赴任したときには、町を挙げての小中一貫教育の推進、そして、この青少年赤十字の推進校という、二つの事業をすべて小中学校で足並みをそろえて進めなければならぬという、なかなか難しい状況

今思えば明らかに間違っているのですが、日本赤十字社福島県支部のみなさまや、前年度推進校の校長先生のご指導から、これが間違っている

と気づくまでに結構時間がかかってしまいました。

間違いに気づいてからは、青少年赤十字指導講師である、土屋悦男先生のご指導を受けながら、すべての学校教育活動で青少年赤十字の考え方を踏まえた実践を行うことができれば、全面的に計画を改め、授業が中心だった研究の柱を「教育課程」「授業の在り方」「教師の姿勢」とし、それぞれについて具体的な実践事項を定め、それを共通理解して全教職員で実践を進めてきました。

「教育課程」では、学校教育目標に「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標を組み入れ、青少年赤十字の理念を実現する取り組みを学校教育目標を実現する取り組みそのものにし、すべての教職員で共通理解して実践することができるようになりました。

「授業の在り方」では、本校が従来から取り組んできた授業改善の三つの視点「児童自らの問いづくり、学び合いの場づくり、学びの価値付け」と「気づき、考え、実行する」を関連させて授業改善に取り組めるようにしました。

「教師の姿勢」では、私たち教師は、何らかの方法で児童の行動を促しつつも、基本的には、児童が「気づき、考え、実行する」ことを「待つ」、そして、気づきによる自主的な行動が見られた時に、大いに褒め、認める、という姿勢で指導することを確認して指導に当たりました。

教師の指導が変わったこと

で、児童に、人道の精神に基づいた言動が数多く見られるようになったことが、推進校の指定を受けて取り組んできたなよりの成果だと思っています。最後に、この場をお借りして、ご指導をいただきました多くのみなさまに御礼を申し上げます。ありがとうございました。

## 青少年赤十字が私たちに もたらしたもの

西会津町立西会津小学校

研修主任 生 江 和 枝

青少年赤十字の研究指定校として、平成二十九年度から二年間、研究を進めてまいりました。この二年間の成果は、とても大きいものと確信しています。なぜ、そのように思うことができたかというと、子どもたちの目の輝きが以前と全く違うからです。

この研究がまだ、軌道に乗っていないときは、どの先生方も「子どもたちが動かない。」と言っていました。教師が言わないと動けない子ども

もたちでした。ですから、本来、子どもたちがやるべきことまで教師が手をかけていたのです。

青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」を合言葉に、子どもたちだけではなく教師も動き出しました。子どもたちが自ら気づくために、教師はしかけをつくり、待つことを心がけました。授業でいうと、「児童による問いづくり」です。子どもたち自身が学級みんなで考



の花」の実践です。子どもたち同士がお互いのよい行いに気づいたら、花に言葉を添えて贈るのです。友達から「ありがとうの花」をもらう子どもたちの表情は顔がほころび嬉しそうです。

青少年赤十字の研究は、子どもたちの主体性を育成するためのエキスが詰まったものでした。実は、これが本来の学校教育が目指すものだと思います。西会津小学校では、子どもたちの奉仕の心を育てるために、VST（ボランティア・サービスタイム）と称して、他人のために自分ができていることを進んで行っています。「先生、VST楽しいです。」子どもたちの声、表情は明るいです。ついには、VSTの時間だけでなく、休み時間も進んで雑巾で床みがきなどをする子が出てきました。

自主的行動を友達や教師から賞賛（価値づけ）され、子どもたちの自己有用感に基づく自尊心は高まっています。それは、子どもたちの輝いた目と活き活きとした行動

えていきたいという意識を作る場面です。その後、その課題追究のために友達との考えをつなぎ深めていきます。その時も教師がどのように子どもたちの意見をコーディネートしていかかが大切になってきますが、子どもたちの本音が出るように、やはりしかけをし、待つ姿勢が大切だと今回の研究で気づかされました。授業で学んだことが日常生活に活かせるように、逆で日常生活で実践してきたことが授業で活かされれば、さらに学びは深められることにも気づかされました。教師からだけの価値づけではなく、子どもたち相互の価値づけも行いました。それは、「よいことの花」「ありがとう



から見て取れます。今まで教師が歯がゆい思いで見ている子どもたちは、教師が何も言わなくても自ら学級を良くするために友達の前に立ち提案

する姿などになって表れています。今日も、元気な子どもたちの姿が西会津小学校のあちこちに見られます。

## 気づき・考え・実行できる 生徒に成長した西中生



西会津町立西会津中学校長

五十嵐 正彦

西会津小・中学校では、日本赤十字社福島県支部研究推進指定校として、平成二十九年度から二年間、青少年赤十字活動の研究を進めてまいりました。また、平成二十七年

度、西会津小学校が併設されて以来、施設一体型小中連携教育を充実し、町の発展と活性化に貢献できる学校を目指して、諸教育活動に取り組んでおります。この度、研究推進指定校となり、小中合同での J R C 登録式やボランティア活動、避難訓練などを通して、小中連携がより強まり、地域の皆様との交流が深まっ

度を身につけてきたことを、強く実感することができました。また、参加された多くの皆様からお褒めの言葉をいただき、生徒も教員も自信となりました。

その後、十一月三日に文化祭が行われました。J R C 学校公開からわずか二週間という短期間での準備に、これまでのような文化祭にできるのかと、誰もが心配しました。しかし、J R C 活動で培われた主体性と行動力、そして、

## J R C の 培 う も の

西会津町立西会津中学校

研修主任 佐瀬 裕子

青少年赤十字の研究指定をお受けして、その深遠なる理念に触れ、目指すものの不変的な価値や崇高さを、ことあるごとに感じました。様々な天変地異が日本列島を襲う中、人々を救うのはやはり人のつながり、温かさです。そして、そうした「人道」や「奉仕」の心こそが、生徒たちに生きる力を与えてくれるものではないかと思えます。それ

を学校生活の中で育むことができた……という願いがあります。そこで、J R C の理念を体現するために、日常生活そのものを感謝や思いやりの気持ちで醸成し、行動にかなげる場にしようとして、「気づき、考え、実行する生徒の育成」(地域理解を深め、地域との交流を柱とした実践を通して)という研究を進めて参りました。

まず、研究主題に迫るための柱を立てました。それが「知・徳・体」です。①「知チーム」言語活動を共通項として、生徒の基礎力を育てる取り組み。②「徳チーム」道徳教育をメインとして、学活と連携した S S T や L S T などのトレーニングも取り入れ、親和性や協働性を育てる取り組み。③「体チーム」異世代間の交流を生かし、意見を交換し、さらにフィードバックを繰り返しながら、より良いコミュニケーションの取り方を考え、身につける力を育てる取り組み、という三本柱です。根底には生徒たちの主体性を伸長させるための教師の姿勢「待ちの姿勢」を置きつ



つ、それぞれが柱となる研究を進め、生徒の力を検証する場面として、生徒たちが自分の住む地域にふさわしい活動を、地域の大人の方と相談して模索、計画し、実行まで行う、「地域ボランティア活動」を設定し、この成果を発表することになりました。

二年間の活動を振り返ると、当初は戸惑いもありましたが、生徒たちは「気づき、考え、実行する」姿を見事に体現していききました。その成長の大きさに、時には感動すら覚えました。それは、「地域のみなさんのために自分ができることはなんだろう」「お世話になっている西会津町のために」という、「恩返し」「奉仕」といったJRCの理念に基づく気持ちが原動力であることは言うまでもありません。発表でも、生徒たちは主体性と実行力の高さを見せ、我々教職員は全く憂慮せずに見守ることができました。そうした変容は、理念に基づく、日々の実践の積み重ねの成果だと胸を張ることができま

せん。生徒たちの地域愛は芽を出しました。これからどんな愛情の花が咲くのか、豊かな実になるのか、楽しみでなりません。このような成果が得られ

れたのも、これまでご支援ご指導いただきました皆様のおかげだと思います。このような研究の機会をいただけたことに、深く感謝するばかりです。心より御礼申し上げます。

## JRC活動は私たちの財産

西会津町立西会津中学校

三年 水野 美 知

JRCの活動を通じ、様々な場面で「気づき、考え、実行する」ことができた二年間だったと思います。中でも、地域ボランティアを自分たちで企画、運営、実行することで、たくさんの方に気づきました。

決めていくことなど、本当にできるのかと、誰もが不安を抱えていたものです。

特に、私が生徒会長という立場で、西会津中学校の全校生が成長したと思う部分は、相手のことを考える、「コミュニケーション能力」です。

私自身も、生徒会長として説明やアドバイスが上手に伝えられず、不安を感じて悩んでいました。けれども、この活動を通して、先生にアドバイスをいただいていたちゃんと説明したい、と思うようになったのです。そして工夫すればするほど、みんなが真剣に話を聞いてくれ、地区の活動に生かして、積極的に活動してくれるようになりました。なんと

も言えない、じわっと胸が熱くなるようでした。

「みんなが喜んでくれることは何だろう。」「自分たちも一緒に楽しめることをしたい

ね。」などとアイディアを出し合い、練り上げた企画。「果たしてこれでうまく伝わるか。」と、何度も話し方を練習した区長さんとの相談会。そして、決まった内容の伝え方や当日の進行の仕方など、不安を抱えて臨んだ地域ボランティア活動。そうした経験の一つ一つがステップとな

って、お互いに話す態度、表情、声などがどんどん変化していくのがわかりました。

「私たち西中生がレベルアップしている。」そう実感できたのは夏休みの中間発表会です。まだまだ未完成でしたが、時間も動きもピタッと合わせることができた私たちの発表に、見に来てくださった先生方から、たくさんのお褒めの言葉をいただきました。



「期待に応えたい。先生方、地域の皆さん、たくさん応援をしてくださった皆さんに恩返しをしたい。」そんな気持ちが私たちの行動を変えたのだと思います。休み時間に打ち合わせをする地

区、家で小道具を作ってくる地区。それからの二ヶ月は一生懸命頑張りました。そして本番。自分たちも満足できる発表をすることができました。しかし、私たちの発表は、今まで支えてくださったたくさんの方々のおかげで成功することができたのだと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいですが、大変なことはありましたが、この経験は私たちの人生にとって大きな財産です。たくさんの気づきによって成長できた、貴重な活動となりました。



# 青少年赤十字作品募集

## 『詩・100文字提案』



青少年赤十字作品募集は「青少年赤十字活動の活性化と意識を高めること」を目標に、平成十八年度から今年度で十三回目の募集となります。平成二十四年度からは、海外の赤十字から寄せられた救援金で行われている「東日本大震災復興支援推進事業」の一つとして実施されています。

今年度は五十三校から四千四百八十七作品の応募がありました。審査は予備審査から第二次審査まで述べ六十数名の審査員の方々により、作品一つひとつに込められた思いを受け止めるべく慎重に行われ各賞が決定しました。

今年度も積極的に応募いただいた学校、適切なご指導を頂きました指導者の方々、進んで応募頂いた児童生徒の皆さんに感謝と御礼を申し上げます。

### 社長賞

### お姉ちゃんと歩いた道

郡山市立富田東小学校 五年 横山 知明

ほくのお姉ちゃんが六年生の時、震災がありました。学



校の先生や友だちと津波からにげました。全員が無事でした。今年の三月、ほくがお姉ちゃんくらいの年令になって、その道を家族と一緒に歩きました。寒くて遠い道のりでした。あの時のお姉ちゃんの気持ちを想像してみたけど、海はキラキラしていて周りもすごく静かで、ピンときませんでした。お姉ちゃんは今でも海が好きです。何年後か町がもとどおりになったらまた家族で住みたいです。

### 日本赤十字社 社長賞

「わたしが感動したことばやできごと」

郡山市立富田東小学校 五年 横山 知明

今年の三月十日、小学生だったお姉ちゃんが津波からにげた道を、いっしょに歩いた。

すごく寒くて長い道のりだった。

当時の気持ちを想像してみたけどピンと来ない。

ただ、となりにお姉ちゃんがいて、うれしいと思った。

## 皆が幸せな社会を目指して

須賀川市立第三中学校

三年 鈴木 眞優

「ヘアドネーション」は、病気や事故で髪を失った子供達に、寄付された髪の毛でウィッグを作り、無償で提供する活動です。ヘアドネーションは、誰かのためにそっと役に立つボランティアだと思えます。どこかで喜んでくれる人がいるかもしれないと思って過ごす毎日は張りがあります。「共に幸せになる」そんなボランティアを目指し、これからも続けていきたいです。

日本赤十字社福島県支部長賞

「わたしにできるボランティア」

須賀川市立第三中学校

三年 鈴木 眞優

ようやく腰まで伸びた髪。  
丁寧に手入れして伸ばし続ける理由は、

「ヘアドネーション」に協力したいから。

もう少しで目標の五十七

センチメートル。

髪をとかさず度、

誰かの役に立てるかもしれないと思える毎日が、少し嬉しい。

## そうまの海

相馬市立日立木小学校

二年 太田 璃音

今年は私が生まれてはじめての海びらきでした。

海びらきの日は、とっても天気がよく、たくさんの人が来ていました。

水に入るとつめたくてとても気持ちよかったです。

私のお母さんは、むかし海の近くに住んでいました。「夏には海水よくにしておひかりとたくさんの人がそうまの海にあそびに来ていた。」という話を聞きました。私はその話を聞いて、そうまのきれいな海にまたたくさんの人がきてくれたらいいなと思いました。



青少年赤十字福島県指導者協議会長賞  
「わたしのふるさと」

相馬市立日立木小学校

二年 太田 璃音

今年 しんさい後

はじめての

海びらき

とってもきれいな海

すきとおった海水

さらさらのすなはま

気もちいかな

たくさんの人に

きてほしいな

そうまの海に

## 障がいがあるということ

福島県立平支援学校

三年 谷 康大

僕は障がいがあることで出来ないことがたくさんあります。だから障がいがあることは不便なことだと思っていました。

しかし、JRCボランティア部に入り、ボランティア活動をしてその考え方が変わりました。不便だと思っていた

障がい、とびきりの相棒になったのです。

そしてこの相棒は僕に「気付き」という考動力を与えてくれました。僕はこの思いを多くの人に発信したいと思い、「二〇〇文字提案」に応募しました。

福島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長賞

「わたしにできるボランティア」

福島県立平支援学校

三年 谷 康大

僕は障がいがあることが嫌だった。

でも、障がい者目線のボランティアをしているうちに、障がいは気付きをくれるものだと思うようになった。「僕だからこそ気付けることを社会に発信する」これが僕に出来るボランティアだ。

## 受賞された皆さん

日本赤十字社 社長賞

郡山市立富田東小学校

五年 横山 知明

日本赤十字社 福島県支部長賞

郡山市立富田東小学校

二年 林 咲空

須賀川市立第三中学校

三年 鈴木 眞優

郡山市立富田東小学校

六年 志田 柚季

白河市立白河第二中学校

一年 ルモイン マノン

青少年赤十字福島県指導者協議会長賞

相馬市立日立木小学校

二年 太田 璃音

福島県青少年赤十字賛助奉仕団委員長賞

福島県立平支援学校

三年 谷 康大

学校賞

福島市立福島第一小学校

郡山市立富田東小学校

須賀川市立阿武隈小学校

相馬市立日立木小学校

福島市立福島第一中学校

福島県立白河旭高等学校

学校奨励賞

福島市立福島第一小学校

須賀川市立阿武隈小学校



## 平成30年度 青少年赤十字国際交流集会

**JRC/RCY**  
**INTERNATIONAL MEETING,**  
**"TOKYO 2018"**

十一月二十二日から二十五日までの四日間、アジア・太平洋州の二十の国や地域から四十名の青少年赤十字・赤新

月社メンバーが、日本全国の三十八名の青少年赤十字メンバーとオンラインピックアップで互いの活動の紹介や文化交流を行い青少年赤十字のリーダーシップを学びました。福島県からはいわき・相双地区から一名、指導スタッフとして二名の教師が参加しました。

また、集会に参加するアフガニスタンの赤新月社メンバー二名が福島を訪れました。十一月十七日から二十二日までの六日間、いわき地区を中心に、県大会への参加や被災地視察、学校訪問など福島県メンバーとの交流を深めました。

### 国際交流集会に参加して

福島県磐城第一高等学校 二年 高坂 伊織

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo2018に参加させて頂きました。十のJRCに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災・災害対応の三つのテーマについて話し合いました。私の班は四人の外国人と、日本人三人のJRCで、防災、災害対応について考えました。その中でも特に印象に残ったことが二つあります。一つ目はワールドワークです。グループごとに会場である国立オリ



ピックセンターの敷地内をツアー形式で回っていき、各ゲームでのポイント合計を競いました。トレセンで実施されているドローイングチャレンジゲームや、赤十字バズル、高齢者レクリエーションの新聞紙スリッパ飛ばしなどを行いチームワークが高まり仲を深めることが出来ました。

二つ目はグループディスカッションです。私の班では災害前、災害発生時、発生後に何が出来るか、何をすべきかのアクションプランをたてるために話し合いました。災害問題としては洪水。水害の多い国や、逆に水不足の地域など日本ではみられないような問題もありました。最後に

は私達JRCメンバー間で出来る活動は無いかなども考え、各国のJRCメンバーでニュースレターを作成しお互いの活動を報告し合うなどのアイデアが出されました。

海外メンバーの青少年赤十字活動紹介では、救急法の普及、募金活動、地域の清掃活動などを行っている地域もありましたが、避難民への支援、水害対応などもあり、その国や地域特有の活動を知ることが出来ました。

二十一日国、半数が外国人で四日間を共に過ごすことになり、初めはとても不安でいっぱいでしたが、語学奉仕団の方々と、先生、周りの方々にたくさん助けて頂き言葉の壁があってもスムーズに話し合いをすることが出来ました。そして、英語が通じなくてもお互いに理解し合おうとした事でコミュニケーションの大切さを実感しました。この貴重な経験を次に繋げ、ここで学んだことをたくさんの人に伝えていきたいです。この様な素晴らしい機会をいただきありがとうございます。

### アフガニスタン 赤新月社メンバー 福島訪問

十一月十七日(土)十一月二十日(金)

アフガニスタン赤新月社メンバー二名が福島を訪れました。宗教や生活習慣の違いなど戸惑う面もありましたが、県大会への参加や被災地視察など熱心に学び、学校訪問では積極的に福島のメンバーと交流する様子が見られました。ご協力頂きましたご家庭、学校等関係各位に心より感謝御礼申し上げます。



日本赤十字社では青少年赤十字活動資金（一円玉募金）を財源とした海外支援活動を行っており、平成二十九年からはネパール赤十字社及びバヌアツ赤十字社を対象としています。

今年度、現地における実際の募金の使われ方や募金によって改善した現地の状況を確認すること、また支援対象国の青少年との交流を通じて「国際理解・親善」について実体験を通じた学びを得、国際社会においてリーダーシップを発揮する人材の育成を目的に全国から九名のメンバーが選出され派遣されました。

本県からは福島県立白河旭高等学校一年坂田実紀さんが参加しました。

平成30年度  
**青少年赤十字海外支援事業  
ネパールスタディツアー**  
2018年12月22日(土)～29日(土)  
訪問国  
**ネパール連邦民主共和国**



一円玉募金で建てられた水道で手を洗う少女

## 県外の青少年赤十字メンバーによる 福島県被災地視察及び 高校青少年赤十字との交流研修

今年度の福島県青少年赤十字連絡協議会県大会には県外のJRCメンバーを招待し、10県から20名の他県メンバーが参加しました。

### 他県高校生とともに震災を考えた県大会

福島県高等学校青少年赤十字連絡協議会会長  
学校法人松韻学園福島高等学校 三年 森 龍太郎

東日本大震災以降、高校JRCは、年間スローガンに「つなぐ」、「伝える」、「発信・発進」等を掲げ震災の体験を他県に伝える活動をしてきました。そして今年度は、他県のJRCメンバーを福島に招き、被災地を巡りながら震災当時の福島の様子、現在の福島の様子を実際に見てもらおう県大会を開催しました。また、現在の高校生は、震災当時小学校二・四年生で当時の記憶がない世代になってきているので、震災の事を後世に長く伝えるために、福島の高校生自身も震災を学ぶことを目的とした県大会でもありました。春の総会で講師の先生から、「被災地には、震災の出来事を伝える『被災地責任』がある」と教えていただいたことを胸に刻んで県大会を実施しました。

今回、参加した他府県のメンバーの意識は皆高く、特に、

東南海地震が予想されている地域からの参加者は、学んだことを自分の県に持ち帰り伝えなければいけないという使命感を持って参加していました。

研修では、コミュニケーション福島やいわきライブミュージアムじあむの展示から当時の様子を学び、津波語り部の方、農園の方、復興団地の方から復興の様子など、多くのお話を聞くことができました。これらは、福島県メンバーにとっても、同じ県内にいながらも今まで知ることがなかったことだったので、今一度震災について考える良い機会になったと思います。そして、今回の県大会のメインとなる情報交換会では、福島県メンバーが事前

に下調べした震災に関することをブースに分かれて発表しました。どのブースからも盛りあがった声が上がリ、県外メンバーからは、「福島はもうすっかり復興しているもの

と想像していたが、実際に来てみるとそうでないことが分かった」という声を聴くことができたので、無事、福島の事を伝えることができたのではないかと思います。

これから日本各地どこでも災害は起こり得ます。それらの災害に備える意識を高めるためにも、私たちはこれからも伝え続けていく必要があります。そのために、今回の県大会での学びを忘れず、今後のJRCの活動に生かして行きたいと思っています。



### あとがき



お忙しいところ原稿をお寄せいただきました方々、協力頂きました皆様に感謝申し上げます。